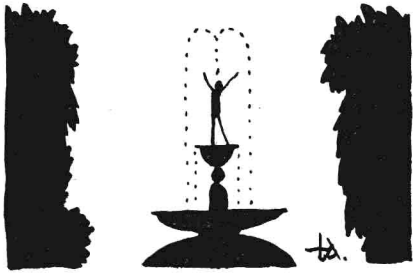
お嫁にいくなら

森村桂

お嫁にいくなら

森村桂



講談社

〈同じ著者によって〉
Lサイズでいこう（講談社刊）
友だちならば（講談社刊）
ビジョとシコメ（講談社刊）
お隣りさんお静かに（講談社刊）
青春がくる（講談社刊）
おいで、初恋（講談社刊）
ふたりは二人（講談社刊）
結婚志願（講談社刊）
チャンスがあれば（講談社刊）
違っているかしら（オリオン社刊）
天国にいちばん近い島（学研刊）

お嫁にいくなら

1968年9月24日　第1刷発行
1968年10月20日　第2刷発行

著　者　森村　桂

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号　112
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京3930

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　山晃製本株式会社

定　価　320円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1968
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

お嫁にいくなら　目次

ぐずぐずしないでお見合いしよう　9
お仲人さんは三千人　14
男性はどこで見分ける　21
一目ぼれこそ　27
十五分が運命を変える　33
結婚までは花であれ　40
失恋を恐れるな　46
男はおだてろ　52
愛は誤解から　58

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

デートはモノモライで　65
ボーイフレンドは数多く　71
かわいい声で「ハイ」　77
やさしさこそ女の命　83
不幸にして美人だったら　90
不美人ならば味方を持とう　96
あなたを好むタイプの男は？　102
生き生きといこう！　108
恋は旅で拾おう　115

職場結婚のチャンスは三回　122
『年上の奥さんていいのよ』　128
適齢期すぎたら年下男性を　135
家つき、カーつき、ババぬき　141
料理が趣味とは何事か　147
ハントのチャンスは三百回　153
花嫁修業にお金はいらぬ　159
花嫁修業は三日か十年　166
男性をアッといわそう　172

ババつきこそ理想 178
危険、不利、不確実、けっこう 184
スター男性は孤独である 191
彼は結婚の意志ありや 197
十年目に実った恋 204
最後の一線を守るべし 210
大切なのは少女の心 216
あなたの適齢期は？ 222

装幀・カット　宮田　武彦

お嫁にいくなら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

ぐずぐずしないでお見合いしよう

「お見合いしたことある？」
「いいえ」
適齢期のお嬢さんに会ってこういう質問をすると、必ず返ってくるのは、否定の言葉である。お嬢さんはつけたす。
「お話はあるんですけど……」
「あら、どうしてしないの」
「だって……。私まだしたくないわ」
「そう、それじゃ無理にすることないわ」
「でも……」
「え」
「困っちゃうんです。家ではしろしろってうるさくて」

「そうでしょうね？」
「適齢期だから嫁きおくれるとか……」
「そうでしょうね」
「それで、いろいろお話があるんですけど……」
「ええ」
「私も、結婚のこと全然考えてないわけじゃないんですけど」
「ええ」
「そりゃあ、いい方がいらしたらいきたいけど」
「いい方って」
「素敵な方」
「条件は？　背が何センチとか、職業とか」
「さあ……お会いしてみなければ解らないでしょ」
「じゃあ、お見合いしたら」
「ええ、そりゃあ、いい方がいらしたらしてもいいと思ってるんですけど……」
アホらしい。ドウドウめぐりじゃないか。この人は結婚がしたいのだ。したくてたまらないのだ。その為にはウノ目タカノ目、お見合いもしたい。だけど、いい口がない。相手といってもこの場合には私だが、いい口をもってきてほしいのだ。
それを素直におねがいしますといえないのだ。そういうと何か焦ってるようで、安っぽく見

えるようで、見栄が邪魔しちゃうのだ。
そのくせ、あとでこのお嬢さんのお母さんが家へ来て、縁談の世話を頼んだりする。お母さんはさんざ私に頼んだあと、
「それで、お嬢さんはその気なんですか」
といえば、
「それが困るんですの、全然その気がなくて。でも私も年をとりますし、何とか早いとこ嫁ってもらわなくては」
これじゃ、せっかく懸命にムコさん探してきたって、やっとのことでお嬢さんが、
「じゃあ、お見合いしてもいいわ」
と義理できてくれて、そのくせ、気に入って、
「親がいうもんですから、少しお付合いだけして……」
となり、一ヵ月後には音信不通、いきなり二人で訪ねて来て、
「私達結婚することになりました」
そして、結婚式はいつ、お仲人さんは彼の会社の上役、そして私には、当日来てくれという通知である。
何が何だか私にはまるで解らない。いや解る、娘心は私にも解るさ、私だって「結婚志願」という本を出した通り、結婚したくてたまらなかった時期があった。かといって、
「ね、おねがい、お見合いしたいの、誰でもいいからよろしくね」

「ね、誰かいない、紹介して」

とふれまわったわけじゃない。おかげで私は二十六まで結婚しそこなった。あぶなくハイ・ミスになりそうになった。これじゃいかんのである。

いい人がいたら結婚したいのだ。会ってみなきゃ解らないのだ。にもかかわらず会ってみないということは、降る縁談があるわけでも、目ぼしい話があるわけでもないのだ。心中大変焦っているのだ。

いいじゃないか、焦っているなら、焦っていると思われたっていい。あの人美人じゃないからねと思われたっていい。要はあなたのウデじゃ恋愛結婚は出来ない、そう認めたらすみやかに行動にうつすことなのだ。

世はまさにP・Rの時代である。どんなエゲツないP・Rをしても、売れればこっちのもの、嫁に行ったが勝ちである。

私しゃ運命を信じるさ。いつか理想の相手が出てくると信じてた。いや、本当はそういうわけじゃない、いつまでたっても誰ももらってくれるわけじゃないから、私しゃ理想が高いのよ、といっていただけなんだ。まどわされちゃいけない。

もちろん、あなたが美人でモテるたちなら私しゃ何もいいやしない。だけど私程度のあなただったら、そして本心は早くいい人と結婚したいなら、立ち上りなさい。

日本て国はおかしな国だ。つい昨日まで自分のことしか考えてなかった女の子が、結婚するや急にまわりの未婚の男性女性が気になる。それを利用しないという手はない。

友だちが結婚したら、一ヵ月だけ自由を与えて、それからせっせと通うのだ。
お化粧し、可愛いミニスカートをはいて、たまには手作りのお菓子やお寿司を持ってニコニコニコと行くのだ。その友だちの家には、亭主の友だちが、それも独身男性が遊びに来る。奥さんは必ずいうだろう。
「ねえ、ミサ子さん、松本さんにどうかしら」
「そうだなあ、合うかなあ」
「合うと思うわ。ねえ、一ぺん会わせてみない」
ということに必ずなる。私の知ってる範囲でも、奥さんの友だちがダンナさまの友だちと結婚した例は実に多い。両方とも二人に刺激されて、身を固めたくなっているし、夫婦の方にしても、世帯持ちが遊びに来るなら、早く帰ってくれていいのだが、独身が来ると夜中までしゃべっているから、新婚生活は落着かない。何とか彼を結婚させよう、彼女がいい、ということになるのだ。
わが親愛なる結婚志願者たちよ、人は会ってみなければ理想の人か、素敵な人か、いい人か解りゃしない。といって、自然にあなたの魅力で集ってくる男性の数はタカが知れてる。
うっかりすると、いきなり友だちとして気が合っちゃって、結婚の対象として考え忘れることもある。それには、〃お見合いの席〃という場が必要である。
人はなるべく多くのうちから選んだ方がいい。われらおせっかいなミセス族をほうっておく手はないのである。

お仲人さんは三千人

「私、女ばかりの会社でしょ、男といえばみんな結婚してるんですもの。これじゃあ結婚相手がみつかりっこないわ。あせっちゃう、会社変わろうかしら」

こういうお嬢さんとよく出会う。まあ、ちょっとお待ちなさい。

ついこの間までオフクロさまが入院してた、大きな病室にベッドが八つの大部屋だ。ここで私の感心したことは実にみんなが仲良く、和気アイアイとしていたことだ。

といっても、これは、

「おばあちゃん、布団が落ちてるわよ」

とか、

「奥さん、どうして魔法びんのふたしないの、いつも気になってたんだよ」

とか、よくまあと思うほど、おせっかいのカタマリなのだが。

ここへ二階から落ちてガタガタになった八十三歳のおばあちゃんが入院して来た。そのおば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.